

# 宮本百合子「小祝の一家」論

— 家族像に見る作者の意識 —

はじめに

「小祝の一家」は一九三三年十二月七日脱稿、翌年『文芸』一月号に掲載された。発表時検閲の關係で削除、伏字が多くあった。本稿は「小祝の一家」(『日本プロレタリア集・二八 宮本百合子集』一九八八年三月 新日本出版社所収)をテキストとして使用した。なおこのテキストは宮本百合子の没後発見された発表時の原稿によって復元されたものを基にしている。

この時期は一九三一年九月柳条湖事件に始まる満州事変が勃発、十五年続いた侵略戦争がおし進められていく状況にあった。その中で一九三三年二月、小林多喜二が特高警察によって連行されその日のうちに拷問で虐殺されたことにみられるように、侵略戦争に反対し社会変革

をめざす闘いの大きな一翼を担っていたプロレタリア文化運動に激しい弾圧が加えられ、その中心的存在であったプロレタリア作家同盟も非常に困難に直面していた。

宮本百合子は初期の代表作「貧しき人々の群」をはじめ「伸子」その他多くの小説、評論を発表、作家活動を続けていたが、三年間のソビエト滞在の後、一九三〇年十二月帰国後まもなくプロレタリア作家同盟に参加した。そして、後述する「書かない」時期を経て創作活動を再開する。その初めの頃の作品の一つが「小祝の一家」である。これは宮本顕治によれば「彼女がプロレタリア文学運動に入って最初にルポルタージュ以外の創作として描いた作品」という位置付け<sup>(1)</sup>さえなされているものである。「小祝の一家」は当時若い詩人として、また宮本百合子の助手として『働く婦人』の編集に携わっていた

岸 本 加代子

今野大力というプロレタリア文学運動の勤勉な活動家の一家がモデルといわれている。

本稿は宮本百合子が家族をどのように描いているか、それは何故か、彼女の執筆時の状況も踏まえ、宮本百合子の作品世界における「小祝の一家」の意義について考察する。

—

物語は作品成立と同時代つまり日本が侵略戦争に突き進みファシズムが社会全体を覆う、そうした暗い状況下を背景としている。プロレタリア文学運動の活動家小祝勉と妻乙女は不況の中故郷A市で生活苦にあえぐ両親弟妹そして養育を頼んでいた幼い娘を呼び寄せ、東京で一緒に暮らすことにした。次々に小祝一家を襲う困難は貧困をさらに深刻なものとする。しかしそれは家族の絆を強めることにもなった。そうした中で、勉の活動に理解を示さなかった父貞之助の変化を乙女が受け止める。作品はこの間厳寒の冬から初夏にかけての出来事を描いて

いる。

「小祝の一家」はこれまでどのような評価を受けてきたのだろうか。

まず壺井繁治は「暗黒時代の諸作品について——作家同盟加入から終戦まで」(『宮本百合子研究』一九五二年一月 春潮社所収)で、はじめに「一個の独立した作品としての強い感銘を与える」と肯定的評価をした上で、貞之助の変化を捉え「時代との関連において、灰色に包まれたこの一家の日常生活の描写を通して、針の穴を通して来るほどの光りをとらえようとした」ところに意義があると述べている。また、登場人物の行動が心理を読み取りやすい形で描かれていることも成功した要因の一つにあげている。

次いで蔵原惟人は一九五五年七月の講演「小祝の一家」「乳房」について「プロレタリア文学運動に参加して非合法的活動をやっている」男の家族の苦難に満ちた生活、「貧しき人々の群」では貧乏というものが何か外から見られているようなところがあるのにならして、(略)なかから」の貧乏、また「自分たちの生

活だけでなくしてほんとうに社会全体の生活をよくして行こうとする意図」さらに夫婦の「清潔な愛情」が当時のプロレタリア文学が観念的になる傾向があった中でリアルに描き出されていることを高く評価している。

さらに小林茂夫も「『小祝の一家』」(『プロレタリア文学ノート』一九八七年六月 青磁社所収)で高い評価を与えている。内容的に「革命家夫婦と家族との愛情の問題について」妻の立場から描いていること、貧しい生活を描く視点を内側におき、もちあがる問題を社会的に捉えていることなどに注目するとともに検閲制度が強化された時代であったことに言及し、広津和郎『風雨強かるべし』と並ぶ「注目さるべき重要な作品」としている。つまり「表現上においても正面から抵抗し、プロレタリア文学としてより深く広いリアリズムへの創造」がなされているという。

時代を経て池田啓悟は「宮本百合子」の生成—中條／宮本百合子「小祝の一家」論」(『昭和文学研究』二〇〇九年三月)でこれまでの先行論とは違った観点から論じている。池田は「小祝の一家」が「中條百合子の

名で雑誌に発表され、その後書きかえられて宮本百合子の名で出された単行本『朝の風』(河出書房)に収められた」ことから初出と『朝の風』収録版を比較、考察し改姓問題の意味を追求している。池田は作中人物「勉と乙女の関係性は顕治と百合子を投影させることができる構造になっている」とする。そして宮本百合子の改姓は彼女が「政治の優位性」を認めたからで、その結果序列化した関係性が生じ、それが『朝の風』版の勉と乙女の関係性に表われている。つまり乙女が「暮し」の劣位を語ることによって勉の運動の優位性を示しているとしていえる。さらに「暮し」の劣位を認めた宮本百合子は「女給」の労働としての観点を切り捨てたという。

## 二

池田の論考を別にすれば、これまで「小祝の一家」は表現のリアルさ、内側からの視点、社会的広がりなどの点で評価を受けてきたといっているであろう。たしかにそれらの評価は妥当といえるものである。しかし作者の

意図はそれのみであつたらうか。

ストーリー展開の主軸はさまざまな出来事に対する一家主に貞之助の態度とその変化、それをもつめる乙女の視線にある。このことに着目し、以下時系列的に物語を追つてみたい。

①貧困の中で貞之助は長男勉の生活のあり方に不満を持ち、運動を理解しようともせず勉を非難する家長そして父として登場する。貞之助にとって生活の全責任は勉が負うべきなのだ。この時期乙女は貞之助、まさ夫妻に預けているミツ子を心配し「——祖父ちゃん、ミツ子をいびつてないだろうかね」「祖父ちゃん……何すつかしないよ」と貞之助に強い不信感を示す。

②まもなく貞之助達がA市から上京、「二間のトタン屋根の下」で一家七人の生活が始まるが、貞之助は早朝五時に起床するものの煙草をふかし新聞を読み一日中黙つて座っている。そんな状態が一月以上続いた。勉によれば「祖父ちゃんは自分の暮らしぶりを観察している」「本当に自分が働き出さねばならないか、さほどでないのか」見ているのだった。貞之助の思いを理解しかねぬ

乙女は「祖父ちゃん、ぼけてしまつたんであるまいか——」と不安になる。

③しかし勉一家の勤勉な生活の中で貞之助が孤立していたわけではない。だからこそ弟の勇が会社の同僚達に「奢りかえせない」貧乏な生活に対する愚痴に、乙女は「祖父ちゃんにも一言何とか云つて貰いたかつた」と思つたのだ。ここには乙女の祖父ちゃんへの信頼が示されている。同時に勉の「勇は、家をすけているんだから、無駄銭つかえないからつて、威張つていいんだぞ」という考え、つまり貧困は個人的なものではないという勉の階級的観点に乙女が共感している姿が描き出されている。

④貞之助の変化はアヤの入院から形となつて表われる。乙女の指示で伯父勘吉の下に金策に出かけその妻お石の弱みに付け込んだ仕打ちに遭遇する。貞之助はここで「——貧乏はついてまわるなあ」と「祖父ちゃんが東京へ出てから初めて乙女の聞く沁沁した調子」で言う。そして乙女の言う「世の中が別なように」なつた後の実例をじつと聞いた後「おやきの道具、あんげなものでも売らねばよかつたナ」というのである。

この貞之助の変化は重要な意味を持っている。「貧乏はついてまわるなあ」という言葉には「A市でも」「東京でも」という貞之助の具体的思いを超えて被支配階級のもつ必然を示唆していいだろうか。また、「おやきの道具、あんげなものでも売らなければよかつたナ」という発言は「貧乏」から脱却する為に働こうとする意志の表われである。それは生活の責任は長男にあるという家父長的さらには封建的考えの克服であるとともに、階級の持つ必然に立ち向かう階級性の萌芽を示していないだろうか。一方乙女がここでも「だから、兄ちゃんのこと云うとおりだろ？」と勉への共感を示し貞之助に説明するなど行動していること、さらに貞之助の変化に「口の中が乾」くほど期待していることは後の乙女自身の変革を考える上で注目されるべきことと言える。

⑤アヤが死んだが葬式を出す費用が無くまた借金を余儀なくされ、骨を預ける寺もない。貞之助はかねての意志を行動すべく駄菓子子の行商を始めた。季節が初夏を迎える頃、貞之助は新聞で全協（日本労働組合全国協議会）の組合員が検挙されたことを知り疑問を覚える。そして

「——駄菓子子の組合つはねのか」と聞き「早く勉のいうような世の中になんねば困る！」という。これは動機が「俺が困る」という個人の域を出ていないとしても階級的観点を踏まえた発言であり、乙女の言うように「祖父ちゃん」の「大きな発展」に違いない。

以上、貞之助の変化は明らかである。同時に乙女が質的に大きな変化を遂げていることに気づく。それは①から④に示されている、徐々に高まる乙女の勉への共感に連動している。構成的には伏線と位置づけられるだろう。

物語の冒頭、乙女は「二月の夜、部屋に火の気というものがない」中でたった一つの湯たんぽを勉に与え、なお「——湯たんぽ、まだ冷えないかい？」と気にかけている。この場面は拷問の後遺症に苦しみながらひたむきに活動を続ける勉への愛と支持を象徴的に示している。そしてその支持は家族が対象とは言え④⑤に記したような行動へと高まる。さらにその質的变化が調査に来た「おまわり」を祖母のまきが「——放蕩かね」「——まあ、そんなようなものでございます」という会話でかわすエピソードに始まることに注目したい。このエピソードは

何を意味しているのでしょうか。この場面で相対するのは「おまわり」と「祖母ちゃん」そして裏で「ききすまし」ている乙女である。この乙女が「ミツ子の小さい桃色のブ羅斯」を握っているのを考えると、「おまわり」に象徴される支配「権力」と権力に抗して闘う勉を守る家族という階級闘争の図が見えてくる。そして乙女の「自分と勉とのつながりについて」の自己検討はこの場面に連動してなされるのである。

乙女はまず「急な情勢の展開から、勉は乙女があれこれ考える暇もなくよそに住むようになった」と現状を確認し「勉は放蕩から自分をすてる男でない」とそのレベルでの信頼を示す。次の「自分が運動についてゆけなければ勉は自分を妻にはして置かないであろう。」はどのようなに解釈すべきであろうか。乙女が「動かし難くはつきり(略)会得」したことは何なのか。乙女が運動を理解せず支持しなくなった場合であっても、これまで勉が行ってきた貞之助や勇に対する粘り強い働きかけを考えると乙女をすてるとは考えにくい。一般的に夫が幾日も家に帰らない状態は「おまわり」がいう「放蕩」であり

妻は捨てられたというのだろう。しかし乙女はそうは思っていない。なぜなら「運動についてゆけない」どころか「運動」を共有しているからなのだ。勉が幾日も帰らず「行方不明」の状態にあっても乙女は妻であり、勉は夫である。つまり乙女と勉は思想的に一致している。そのことを明確に認識した(「会得した」)乙女の感動は次のように描かれている。

乙女は自分と勉とのつながりについてこれまでになく深いものを感じた。(略)プロレタリアの運動の働うちと勉の働うちがいつしか身にしみこみすぎている。乙女は、それらのことを考え、勉が家を出てから初めて、枕の上に顔を仰向けたままミツ子を抱いて永いこと睡らなかつた。

⑤に示す最後の場面は「乙女が勉のテーブルに向い本を読んでいた」と学ぼうとしている乙女を描き出す。貞之助の質問に「たどたどしい説明」をし階級性に触れる質問に「何だかどぎまぎして、眉をつり上げ」る乙女は

もはや単に勉を支えるだけの妻ではない。「早く勉のいうような世の中になんねば困る！」という貞之助の言葉に「それは、俺が困るといふ調子ではあつたが」と乙女はその不十分さを指摘している。ということは乙女自身

は個人的な幸福ではなく、階級的な解放を求めていることを示している。そしてすでに初夏を迎えたその日家族を守る為仕事に行く支度をしながら同志としての夫、勉を思う乙女の姿で物語は結ばれる。凜とたつその姿は冒頭、粗末な搔卷をはおりテーブルに顔を伏せて凝つとしている乙女が運動の活動家として成長した姿に他ならない。

乙女は間もなくからみつくミツ子を祖母ちゃんにだまらせながら着換えに立った。

帯を結ぶ間も、大きい雨洋傘を背広の小柄な体の上にさし、口を結び、こつこつと歩いて行く勉の姿が乙女に見えるような心地であつた。

さて池田啓悟は宮本百合子の「改姓」問題を「政治の

優位性」を土台とした顕治との「序列性」に起因するものとしている。そしてその論拠の一つに乙女が自己検討を加える場面を挙げ次のように述べている。

(略)「運動」についていけなくなつたら勉が自分を捨てるだらうと語られている。最も価値があるのは「運動」政治であり、この段階ですでに政治の優位性が姿を現している。

ここで問題なのは池田が「自分が運動についてゆけなければ勉は自分を妻にしては置かないであろう」という乙女の内省の言葉をその字面のままに解釈していることである。それならば、乙女は「捨てられない」ためにこれまで勉を支え、以後運動に一層献身しようとしていたのか。物語が乙女をそのように描いていないのは明白である。乙女の運動に対する不信や不安は描かれていないのだ。また彼らに与えられた名前からも作者の意図は推測できる。すなわち「勉」には「努力する」、「乙女」には「純粹」という意味が含まれている。プロレタリア階

級の解放のために努力する「勉」に何の下心もなく思いと行動をとともにする「乙女」、そして「小祝」はそれを祝福する物語の流れを示してはいないだろうか。

また「捨てるだろう」などという文言は本文にはない。「妻にして置かない」と勉を主体としていることの意味は、乙女が「ついていけないくなった」としても勉の思想は変わらない、つまり運動に対する強固な意志を言っているのではないだろうか。

また乙女の自己検討の直前の次の描出についての池田の解釈にも疑問を呈したい。

三十年來、貧乏をしつゝけながら、祖父ちゃんは自分ひとりでは飯もたけないまゝ、を押しとほしてどうやら勇も小学を出し今日まで暮らして来た。いつか勉が、祖父ちゃんは祖母ちゃんて持つてゐるのだと云つた。

池田の解釈は「貞之助との関係においてはまきの存在が決定的なものであることは勉自身が認めている」とい

うものである。ここでも池田は「祖父ちゃんは祖母ちゃんて持つてゐる」という字面だけで判断している。これはまきが「おまわり」の追求に対して持ち前の愛情深い賢さでうまく交わした後、まきに対する評価として述べられているものである。貞之助との関係について述べられたものではない。

こうした解釈を根拠に池田は宮本百合子の「改姓問題」及び「女給に対する考え方」に論を展開しているが、本稿では目的との関係から解釈への異論を提起するに留めたい。

次にお石とその言動について考えてみたい。

お石は貞之助の伯父で、「十何年来町役場の書記を勤める」勘吉の三度目の女房である。彼女は酌婦上がりで評判がよくない。なるほど借金の弱みを持つ小祝の家族から不当な金を巻き上げさらに痛めつけてはばからない。幼いミツ子への思いやりも見せない。お石はかつて酌婦であったとされている。「酌婦」は「料理屋などで客の相手をするいかがわしい職業の女」（『日本語大辞典』一九八九年十一月 講談社）とされている。当時の歴史



から貧困家庭の少女たちが家族の犠牲となつて身売りさせられたケースが多く見られる。であるならば貧困家庭の状況も心情も理解できるはずである。また階級的にもその出身が何であれ連帯できる立場にある。ところがそれどころかお石は官憲に小祝家の情報を売り渡すこともする。要するに金の為ならばなんでもする元酌婦として描いている。何故であろうか。

ところで物語にはもう一つの重要なエピソードが描かれている。勉が官憲から雑誌を守る為に雑木林の中に持ち込んで発送の準備をしていた時若い三人の学生たちが暗黙のうちに口笛で人が接近していることを伝え守ってくれたというのがそれである。「学生」は当時であればエリートである。このことはこうした知識層の中に運動への理解が広がっていることを伝えている。お石の言動が階級的観点から後退している部分とすれば学生たちの行動は前進している部分といえる。

当時プロレタリア文学は図式的、教条的など観念的であるとの批判があった。そうした中で宮本百合子は運動の正、負の両面をありのままに描こうとしたのではないか。

またお石が突きつける無理難題は小祝の一家を結束させ階級的に高めることに繋がり、勉が感動を持って伝えた学生たちの支持は乙女の確信をさらに強いものにしたであろう。これらが果たしているこうした構成上の役割も指摘しておきたい。

さらに物語の全体を通じて、経済共同体としての家族とその土台の上で認識を一致させていくその姿が浮かび上がる。A市と東京とバラバラに生活を営んでいたときには互いに理解しあえない状況にあった。「いっそ、すっかり畳んで出て来いと云つてやろう」と勉が考えた時「勇が働き、貞之助は納豆でも売り、祖母ちゃんはそのままで手ぎらいな性質で何か内職でもやれば、どうにか食つては行けるだろう」という見通しもあったが、「こつちの暮しを目で見て、一緒に思い知ればいいんだ」と家計を一つにすることで認識を一致させようという思いが示されている。そして勉が考えたように家族のそれぞれは生きるために働き、絆を深めていったのである。

以上作品の分析から宮本百合子が小祝の家族について主に父貞之助と妻乙女に焦点を当て階級的に変化發展していくものとして描いていることが分かる。宮本百合子はなぜそのような描き方をしたのか。

当時の社会変革を求める運動は冒頭記したように非常に困難の中にあつた。治安維持法によって検挙された者は数十万に上るといわれる。さらに治安維持法犠牲者国家賠償要求同盟の調査によれば一六八二名が虐殺、獄死、病气その他の理由で死亡している。さらにこの時期運動の指導者達の転向は大きな衝撃を与えた。運動の壊滅を求める支配権力がこの「転向声明書」を利用したことを犬丸義一・中村新一郎共著『物語日本近代史3——民衆運動の高揚から敗戦まで』（一九七一年一〇月 新日本出版社）は次のように伝えている。

司法当局は、「思想教科の好材料」としてこの声明書を全国の刑務所に配布し、わずか一ヶ月の

うちに治安維持法違反の未決囚の三十パーセント（千三百七十人のうち四百十五人）、既決囚の三十六パーセント（三百九十三人のうち百三十三人）を転向させることに成功したといわれます。激しい拷問やながい拘禁生活にたえきらぬ弱さ、家族の寵愛・義理、生活の苦難などがからみ、戦争による民族的自覚とか、皇室の歴史性とかの「理論」に助けられて、このような大量の転向者をうんだのでした。司法当局が、転向の有無によって刑量の軽重を左右した政策も、これにあずかって力がありました。

こうした中でプロレタリア作家同盟は一九三四年二月解体を余儀なくされる。「小祝の一家」発表の一ヶ月後のことである。

執筆当時の宮本百合子は自身も検挙・拘留されるといふ状況にあり、非合法活動に入った夫との音信も途絶えていた。「小祝の一家」を執筆した一九三三年について宮本百合子は自筆年譜（註）に次のように記している。

(略)一九三三年は文学的には殆ど活動不可能の状態であった。左翼に対する弾圧は、ジャーナリズムの上にプロレタリア作家の活動する余地を与えなかったし、私個人の生活事情から言っても落ち着いた日は一日もなかった。

こうした事実は多くの「小祝の一家」と同様の人々が存在したことを示すとともに宮本百合子自身が「乙女」と同じような立場にあつたということを伝えている。

宮本百合子は「問いに答えて」(『文芸通信』一九三四年十二月)を著わし「この三四年の間、小説を書かないのは何故であるか」という記者からの質問に答える形で当時の自身の心情と小説におけるリアリズムの問題について述べている。以下記述に沿って追ってみたい。

まず、宮本百合子は今はずでに「書いている」状態にあることを次のように主張する。

私の今の状態から云えば、この問いの中で書かな

いと云われているところは既に書かなかったという、文法の上では過去の形でされる方がふさわしいし、又全く小説を書かなかったというわけでもないが、質問そのものは面白く思った。

「問いに答えて」は「小祝の一家」発表のおよそ一年後に書かれている。彼女自身が「既に書いている」としているのだから、宮本百合子がこれから述べようとしている書くことについてのあれこれは「小祝の一家」にも当てはまると見てよいであろう。

次に書かなかつた期間について「雑誌の上に、目立つ作品は書かぬが、生活的にはその期間に却って(略)大切な成長がされている場合もある」と意義付けている。その間「日本の複雑きわまる急速な状況の移り変わりにつれて實際生活の上で経験した事柄というものは、その内容を見ると時間では計ることの出来ない程多く深いものを与えている」にも拘らず「書かなかつた」理由を述べるにあたって彼女は小説について言及し、現象を「ただあつた通りに書」くのではなく「その現象は根本的に

どんな動機、社会的な相互関係の上で起っているかということを今日の世の中の現実の姿の中に擲んで「強い生活の絡み合いの姿、そこで生き死にする人間の心持を再現する」ことを強調する。そしてそのための力量を身につける為には一定の期間が必要でそれが「書かなかつた」時期なのだという。宮本百合子はその思いを次のように述べている。

一人のインテリゲンツィア作家が歴史の必然的の力によって階級的な移行をした場合、その作家の中にはその必然を自身の要求として理解し勇しく新しい困難の中に進んでいこうという決心を中心として、さまざまの感情は確に身についたものとして持つている。しかし自分が新たに所属した階級に生れ育ち闘っている人々がその生活の中から与えられて持つている心持ちを、いきなりそのものとして持つことは殆んど絶対に不可能なことである。新しくプロレタリア作家にふみ出した私のような作家の場合には、このことが当然いえるのであって、若し私

が筋を書いた小説ではなく本当に小説らしく心をも捕えてそれを生かしている小説を書き度いと考えたならば、少なくともある時期は、多くの困難と努力で、階級的な大小の実践的訓練を経て、自分自身の感情をも叩き上げなければならない。

そして彼女はさまざまの事物について以前とは違い「強烈なまなましい対立する力の形象化をそこに感じ」ているとし「(略)表面的には一見同じようなものとして表われている現象の、複雑な内容にまで触れてそれを観ると、実はそれぞれがそれぞれの過程を持って現代の社会の根本的な矛盾を反映して」おり「その急所を掴む眼」は「社会の現象万端を動的な発展的なものとして観ることの出来る世界観によって培われるのではあるまいか」と述べていることは注目される。

### おわりに

宮本百合子は登場人物の階級意識について作品世界に

おける到達をまきの場合は意識下のものとし、貞之助の場合は階級意識を持ち始めたものの不十分なものとして描いた。また乙女の場合は運動を支持するものから実践するものへの質的变化をなしたものとして描いた。さらにそれらの変化は自然発生的に起こったものではなく、さまざまに展開する事象に関連しければ必然として出現している。また、彼らを取り巻く状況を全面的に描出しようとしている。

新しくプロレタリア作家同盟に参加した宮本百合子はプロレタリア階級の出身ではないだけに納得のいく作品を書くには「全力的な発展のための努力」が必要との自覚を持っていた。彼女にとって「小説を書く」とは一つの現象の中に反映されている根本的矛盾を芸術の中に再構築することであり、その力はすべての物事を発展的に捉える世界観によってこそ培われるものであった。「小祝の一家」はそうした彼女の努力を反映した作品として仕上がっている。

階級闘争の非常な困難の中にあつてなお献身的に闘う一家族の階級的な成長を描いた本作品は宮本百合子の全

仕事を考えるととき記念碑とも云えるものではないだろうか。

注

(1) 宮本顕治「作品をめぐる追想と解説」(宮本百合子『播州平野・風知草・二つの庭・その他』一九五一年二月、改造社)

(2) 例えば宮本顕治は『宮本百合子の世界』(一九七五年二月、新日本出版社)の中で次のように書いている。「この作品(引用者注、「小祝の一家」)の題材は、日本プロレタリア作家同盟の若い詩人今野大力の一家であつた。」

(3) 宮本百合子『宮本百合子全集別冊』(二〇〇四年一月、新日本出版社)